



Title	下中弥三郎の生命主義教育論：デモクラシーとファシズムの間 [全文の要約]
Author(s)	伊東, 順真
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第16038号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92736
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	ITO_Junshin_summary.pdf



[Instructions for use](#)

博士論文の要約

博士論文の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：伊東順真

学位論文題目

下中弥三郎の生命主義教育論 —デモクラシーとファシズムの〈間〉—

本研究は大正新教育期に個人と自由を尊重する教育論を展開したのち、1932年頃を境として国家主義・全体主義教育論者に転身した下中弥三郎について、彼の思想を領導していた「生命」という言葉に焦点を当て、その思想的軌跡を明らかにすることを試みたものである。その際、すでに先行研究では新教育期の生命思想の流行が指摘されていることを承け、下中のみならず赤井米吉、志垣寛、野村芳兵衛についても俎上に載せ、彼らを比較検討することによって下中以外にも視野を広げた教育思想史研究となるよう努めた。

本研究は思想と行動の変転していた下中弥三郎に一貫して見られる生命言説に着目するものであり、彼の著作を史料内在的に分析するという方法をとる。下中は啓明会や教育の世紀社、農民自治会、また大亜細亜協会や大政翼賛会など様々な組織に所属し、積極的に活動していたわけだが、その中で各団体の機関誌や関連誌など多様な媒体に寄稿していた。また自身が平凡社の創業者であったことから自ら著書を出版することも少なくなく、様々な出版社からいくつもの著書を発表していた。その多くのものの中に、継続して「生命」の語は見られている。本稿ではそうした下中の著作について、1920年頃から1945年までを三期間に区分して分析する。すなわち1920年頃から1926年頃までをデモクラシー期、1932年以降1945年までをファシズム期とし、そしてその間の生命言説が見られない時期を〈間〉として敢えて設け、それぞれの期間について分析していく。

章構成は、次のようになっている。

第一章 関心と課題

- 一 はじめに—「エタイの知れぬ怪物」
- 二 先行研究
- 三 方法と史料
- 四 課題設定と章構成

第二章 近代日本と「生命」

- 第一節 「生命」という言葉
- 第二節 「生の哲学」の受容
- 第三節 日本における「生命」の流行

第三章 デモクラシー期の生命主義

第一節 新教育運動の旗手として一啓明会から教育の世紀社へ

第二節 生命主義教育論

第三節 教育の世紀社同人の教育論

第四章 生命主義の変調—社稷から生命国家へ

第一節 農民自治会の設立

第二節 権藤成卿の社稷論

第三節 農村自治教育論

第四節 大川周明の生命国家論

第五章 ファシズム期の生命国家論

第一節 政治活動家として一大亜細亜協会から大政翼賛会へ

第二節 生命主義教育論

第三節 教育の世紀社同人のその後

第六章 本研究の総括

以上の構成より成る本研究はデモクラシー期からファシズム期の下中弥三郎の思想遍歴を明らかにすることに眼目を置いたものである。下中弥三郎はデモクラシー期、啓明会や教育の世紀社で活動するなか、個人の内発本性である「生命」のみを尊重し、既存の教育制度や形式、文化についてはその成長を阻害するものとして一切を否定する教育論を説いていた。その生命概念はベルクソン思想からの影響が認められる。彼において「生命」は自然な教育理想の象徴であり、近代西洋的・合理的な文明の反措定を意味する超越観念であった。1925年頃より下中は農村での「自治」を説くようになる。とはいえ「自治」もまた生命と同様に西洋資本主義文明への対抗概念であり、デモクラシー期の生命主義教育論と連続的に捉えうる。この間、農本主義者・権藤成卿の自治思想に強い影響を受けている。しかし下中がどれほど教化・啓蒙に努めようとも資本主義に搾取され続ける農村の苦境は悪化する一方であり、下中は模索の末、自らの戦略を転換させる。西洋資本主義文明を打破する活路を、搾取のない、国民の総意としての支配を掲げる、国家主義者・大川周明の生命国家論に見出すのである。

1932年以降に下中が唱えた生命国家論は、万世一系の天皇を国家の要とし、皇室と国民との血縁を国家結合の基礎に置く生命体的な国家論であった。下中は農村衰弱の元凶と見定めた日本の資本主義的産業を超克する方途として、法治主義や議会主義を排し、天皇を中心とする政治経済的・宗教的一君万民を実現するという道を選んだのである。日本的であることを標榜し、全体主義を掲げる生命国家の建設が教育理想に位置づいたことで、下中の教育論は総力戦国家体制の確立を訴えるものとなり、国家のための個人の死を歓喜の極致とする天皇信仰を説くものとなる。デモクラシー期に子どもの内発本性を意味していた「生命」はファシズム期に至って「国家生命」へとその意味を変調させていた。両時期にかけての彼の教育論は、近代西洋文明の反措定である「生命」を全面に掲げた教育論と

して連続的に捉えうるものであった。

このような下中の思想的変転にとって、注視すべきはその変転が最も顕著に見られた1932年頃のアナキズムの否定、そして支配の肯定であろう。本稿が主眼を置いたその変節の理路をここで改めて整理しておきたい。1920年代後半より下中は農村で自治を説くようになるが、ここで権藤成卿から大きな影響を受ける。権藤が自治思想の核心においた「社稷」とは農民の豊かな暮らしそのものを指していたが、これはつまり農民の生命を最大限尊重する、農本主義的な立場からの生命主義思想であった。重要であるのは、社稷はそれ自身の危機にあつて、民の生命を守るべく国家へと拡張を遂げる点である。この場合国家の唯一最大の目的は民の生命の保護であるわけだが、逆に言えば国家なしには個別の生命は守り得ないとする理路が開かれ、国家こそを要とする思想へと転倒しうるのである。1920年代後半とは農村の苦境が深刻さを増しており、下中の理想とした社稷的自治共同体が崩壊の一途を辿っていた時代である。

そうしたなか下中は、旧知の仲であつた大川周明が説く、西洋資本主義文明の超克を唱え、自然的・アジア的支配を標榜する生命国家論を摂取する。下中は農民の生命を回復する活路を、デモクラシー期に自身の思想と行動の原理であつた「生命」、これを僭称する国家支配論である生命国家論に見出し、積極的に生命国家支配を喧伝するに至つたのである。大川にとって国家は自身の理想である「永遠の生命」を仮託したものであり、普遍的なものであつた。民の生命を守るはずの国家が絶対化された生命国家論であつたから、それが強固な国家主義、全体主義論であつたことは察するに余りある。個人主義から国家主義、全体主義への、「生命」を理念とした下中の軌道の「転轍」である。

こうした下中の転回はむろん彼自身においては生命主義という点で一貫したものであつただろう。デモクラシー期からファシズム期にまたがる彼の教育論は、生命主義教育論としては連続しつつ、他方一貫する教育理想の象徴であつた「生命」が個人から国家へと著しい拡張を遂げた点は不連続であつたわけだが、下中において生命の意味論的拡張は違和感なく受容されていた。ここに大正新教育期の教育家が抵抗なくファシズムの推進者に転じた契機がある。教育が人間の生の営みに直接関与する以上、教育論における「生命」は子どもという経験的実在のみを見つめるべきであつただろうが、下中において「生命」はベルクソン思想に触発を受けたものであり、すでに超越観念化の傾向を孕んでいた。加えて、本来生命たりえない国家を「生命国家」と偽装した大川周明の論理である。こうして「生命」は歴史的・社会的制度に過ぎない国家観念に容易に適合しえたのである。

「生命」を極端なまでに称揚し、文化や体系を肥料や排泄物であるとして一切の教育内容を否定したことの陥穽がここにはある。「生命」が往時の人々の生命の軌跡でもある文化全般を否定することに眼目が置かれ、普遍化し、超越観念化したことで国家への拡張が果たされた。生命主義教育論は大正期教育運動の達成として一定評価されて然るべきであろうが、文化を全否定するのではなく、いまこの個人の生命の成長に寄与する、そのような国民の共通教養としての教育内容の模索の道もあつたのではないだろうか。平凡社百

科事典の産みの親たる下中であれば尚の事である。下中はそのアナキズム的傾向からあくまで子どもの生命のみを見ようとしていたものの、そこにはすでに個々人の生活には還元しきれない、生命の超越観念化が潜んでいたのである。

下中を通して明らかとなったこの論点が教育思想史研究としても重要であるのは、生命概念の拡張の末、国家生命の扶翼を説くに至るという矛盾した思想の推移が、「エタイの知れぬ怪物」たる下中弥三郎のみに特異的に見られたわけではない点である。新教育期、赤井米吉は宗教的超越存在である「神（生命）」を被教育者に体现せしむることを教育目的に据え、志垣寛は宇宙論的にして個別具体的でもある「生命」の成長を第一とする教育論を説き、野村芳兵衛は阿弥陀如来と同一視した「生命」への一切の生活の帰依こそを教育と見做していたように、三者とも超越的な生命を基軸概念として自らの教育論を構築していた。そののち昭和戦前・戦中期に至ると、彼らの生命概念は天皇（皇室／国体）を中心とする「生命国家」あるいは「生命世界」へと変容を遂げてしまう。赤井は 1938 年頃より西洋資本主義文明を超克する日本的な生命世界論を自説として展開し、志垣は 1941 年には全体主義を基調とする生命主義世界の実現を声高に主張し、野村も 1935 年の天皇機関説問題を契機として国家生命を要諦とする全体主義的な国体論を唱えるに至っている。こうした八紘一宇的な生命的新秩序の建設が第一に掲げられたことで、彼らの教育論もまた国家主義的、全体主義的なものとなっていった。赤井、志垣、野村の「生命」はエマソンやベルクソン、親鸞に由来するものであり、その時点ですでに人間個人のみを捉えるものではなかった。彼らが奉じた超越的な生命は新教育期には子どもを捉えていたが、国家を一つの生命と見做すという大川を筆頭とする言説が一世を風靡するや否や、雪崩を打って超越的生命として国家を奉じるに至るのである。志垣の自覚的な言明に象徴される、生命思想に彩られた大正期の教育運動と全体主義国体論との看過しがたい連続性である。生命の自由な成長を尊重する大正期の教育思想は、子どもの学習権や生存権の主張を導いたものとして評価しうるものだが、大正新教育運動を「生命」の躍動として顕彰するだけの理解は、「生命」が経験的かつ超越的な観念であり、容易に集団や社会、民族や国家にまで拡張されてきた思想史的経緯を踏まえれば、一面的で危ういものと言わざるを得ない。

近代日本にあつて「生命」は、実体でありながら機能でもあり、経験的でありながら超越観念的でもある奇妙な二重体であつた。明治初期、“life (Leben / vie)” の翻訳語として流布した「生命」は経験的な実体を意味する側面が強かつたが、西洋由来の生命哲学の流行はその意味合いを変調させた。西洋哲学の主題の一つに世界の窮極根底をなす真の实在を何と見るかとする議論があり、キリスト教は「神」に、ドイツ観念論哲学は「精神」に、あるいは実証科学や唯物論は「物質」に見出すなどしてきたなか、19 世紀から 20 世紀にかけて登場したのが「生命」を真の实在と見定める「生の哲学」であつた。以後、「生命」は世界を説明する原理として超越観念たりえ、機能たりえ、遂にはある特定の歴史的・社会的制度である国家（リヴァイアサン）にも投影されてしまう。尊重すべき「生命」と「国家」が同一視されたとき、ましてやその国家が永遠の生命の顕現であると見做された

とき、国家生命は個人的生命を、絶対的・普遍的な全体を支える「細胞」として遇し、生殺与奪の力を奮うのである。生の哲学の台頭の機縁からすれば、人間の「生」そのものの回復を企図し、生命をいかなる価値より上位に置くはずの生命主義であったが、それは国家生命の永続をこそ至上命題とする生命国家論へと矛盾的展開を遂げたことで、個人の生命を軽視し消尽する全体主義国家論と化したのであった。個人を尊重する教育論がファシズム教育論へと旋回した思想史的経緯はこのようなものである。